九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

戯曲による教化 : 邱濬『伍倫全備』を中心に

岡村, 真寿美
九州大学 : 非常勤講師

https://doi.org/10.15017/9629

出版情報：中国文学論集. 29, pp.39-53, 2000-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

戯曲による教化

――邱濬『伍倫全備』を中心に――

岡村　真寿美

一、はじめに

通俗文学、特に明代の戯曲の内容を考えるに、当時の南戯について、呂天成『曲品』は次のように言う。

其の門類を括するに、大約して六有り。一に忠孝と曰ひ、一に節義と曰ひ、一に風情と曰ひ、一に豪俠と曰ひ、一に功名と曰ひ、一に仙佛と曰ふ。元劇の門類は甚だ多きに、南戯は此に止まる。[1]　（巻下）

すなわち、南戯はおおむね六種に分類され、元劇にくらべバラエティに乏しいと指摘するのであるが、それが事実であるかどうかについては今は置くとして、ここで「忠孝」「節義」がその首に挙げられていることに注目したい。これは、当時斯様な道徳観念が戯曲の主題としてかなり重要視されていたことを意味する。

一方、明初は戯曲創作に対する規制も厳しく、永楽年間には次のような禁令が出されている。

永楽九（一四一一）年七月初一日、該刑科署都給事中曹潤等奏して法司に勅下せられんことを乞ふ、今後、人民、倡優の装扮せる雑劇は、律に依りて神仙道扮、義夫節婦、孝子順孫、勧人為善及び観楽太平なる者の禁ぜざるを除く外、但有ての帝王聖賢を褻瀆するの詞曲、駕頭雑劇など、律の該載する所に非ざる者、敢て収蔵、伝誦、印売するもの有らば、一時に拿へて法司に送り究治せんことを、と。聖旨を奉ずるに、但て這等の詞曲、出榜の後、他五日を限りて都て乾浄し将て官に赴き焼毀し了ることを要し、敢て収蔵するもの有らば、全家殺了せん。[2]　（明、顧起元『客座贅語』巻十「国初榜文」）

明初の政権基盤の充実を図る時期であれば、思想統制も強力に推し進められたことであろう。それが当時の戯曲創作に影響を及ぼしたであろうことは想像に難くなく、結果「義夫節婦」「孝子順孫」「勧人為善」といった内容が主流を占めることになったとしても、何ら不思議はない。(3)

そもそも中国における戯曲・小説の類は、正統の文学とするに足らない通俗的作品群として極めて低い評価しか与えられず、真っ当な知識人であれば関わりを持つべからざるものとして蔑視されていたといってよい。しかし一方で、それらの作品は庶民層、時には文人階級にいたるまで多くの愛好者を持ち、結果として、長年にわたって実に夥しい数の作品が世に送り出されてきた。その際、著者や出版者は、しばしば己の作品の正当性を如何に主張するかに腐心し、往々にして民衆の教化に対する効用をその存在意義として標榜する傾向があった。例えば、元の夏庭芝『青楼集』自誌に、

雑劇は、……皆以て人論（ママ）を厚くし、風化を美くするべし。(4)

と言い、

また、『三国志通俗演義』の嘉靖壬午修髯子（張尚徳）引に、

客余に問ふ、「……、復た所謂『三国志通俗演義』なる者有り、贅なるに幾近からずや」と。余曰く、「否。……是是非非は心目の下に了然たり、風教を裨益すること広且つ大なり、何ぞその贅なるを病むや」と。(5)

という等は、その好例であろう。実際には、当時の戯曲や小説は必ずしも人倫に関するものに限らず、実に多彩な内容を持っていたにちがいない。にもかかわらず、この様な表現が行われるのは、その作品が人倫を説き、風俗を善化する効用を持つと強調することで、文学としての価値を高める目的があったと考えられる。

この様に通俗文学は多分に道徳的内容を標榜する傾向にあったことがわかる。とすれば、それが作品の内容に全く反映されなかったとは考えにくい。結果として、通俗文学作品が実際に読者の教化にある程度の役割を果たすことも多かったであろう。儒教的道徳観の宣揚を標榜した作品の多くは、忠孝節義の類を題材にしつつも、その中でいかに新奇な物語を展開させ得るかに苦心したはずであり、また、それこそ作品の価値を決定する重要なポイントであるに相違ない。しかし、題材に道徳的要素を含む以上、「受容者の教化」もまたそれらの作品の持つ特質の一

端となることも事実である。さらに一方では、知識階級以外の者にも広く愛好されているという通俗文学の特点を利用し、実際に「受容者の教化」を主題とする作品も作られた。してみれば、その「教化」という特質の分析もまた当時の通俗文学を読み解く上で研究の欠くべからざる点であると言えよう。そこで本稿ではこの通俗文学の「教化」という側面について、その特徴が顕著である明初の戯曲『伍倫全備』を中心に論じたい。

二、邱濬と『伍倫全備』

『伍倫全備』は、全名を『伍倫全備忠孝記』、又『伍倫全備綱常記』といい、全二十九齣、春秋時代呉の伍子胥の末裔である伍倫全、倫備兄弟を主人公とする。[6] 以下、その概略を述べる。

太平郡の伍典礼の後妻范氏に育てられた伍倫全、伍倫備、典礼の友人の息子安克和の三人は、施善教に学び、倫全・倫備は施家の娘淑清・淑秀と婚約して科挙に赴く。倫全は状元となって諫議大夫に、倫備は榜眼となって東陽刺史にそれぞれ任ぜられる。時の丞相より倫全に縁談が持ちかけられるが倫全は施淑清との婚約を守り、三人帰郷して婚儀が行われる。

その後兄弟は妻を残して赴任するが、倫全は政界の奸悪を暴く書を上らせたことから時の権力者の恨みを買い、師である施善教を推薦したことを公私混同とされて、府州団練使に左遷される。さらに、今度の任地は防備の手薄な辺境であったため、倫全は異民族に軍師にするために捕らえられてしまう。一方、淑清は伍家の後嗣が無いことを心配し、姑の范氏に仕えるため故郷を離れられない自分の代わりに、倫全に妾を送るが、途中で山賊に襲われ、妾は節を守って自殺する。倫備、安克和等は倫全の救出に向かい、正面から虜営に乗り込む。虜主也克罕は倫全・倫備・安克和等の人柄に感動し、ついに中国への投降を決意する。

その頃、范氏は息子の身を按じるあまり病気になり、淑清は自分の肝を、淑秀は股の肉を食べさせるが、その甲斐なく范氏は亡くなる。倫全・倫備等は伏夷の功により、全員新たに官職を賜り帰郷するが、范氏の死を知り、墓前に哭泣する。その後、順調に官途を全うして致仕した倫全・倫備等一族は、すでに登仙していた施

善教・范氏に迎えられ昇天登仙する。[7]

この『伍倫全備』の作者とされる邱濬（一四一八?～一四九五）は、明初の著名な儒学者で、『大学衍義補』等の著作で知られ、明史巻一八一に伝がある。景泰五（一四五四）年の進士で、官は太子太保、戸部尚書、武英殿大学士に至った。[8]明代には、多くの一流文人達が戯曲を作ったと言われるが、『伍倫全備』を作ったとされる邱濬はその初期の人物の一人ということになろう。[9]

さて、『伍倫全備』はその題名からも推測できる通り、儒教的倫理観の宣揚そのものに主眼を置いた作品であるとされる。主人公の名及び題名は当然「五倫全備」を掛けたものであり、人として践み行うべき五倫の道を説く内容となっている。

その副末開場には、この戯曲の性格が端的に示されている。先ず、作者が戯曲というスタイルを採用した点について、経書や詩の類が世人を教化するものであると認めつつも、今の時代では歌曲の力に及ばないとし、

古人の歌詩は、今も現存するが、読書秀才といえどもこれを説き聞かせても理解できないのに、ましてその余の人がわかるはずもない。古詩ではなく、今人の作った律絶選詩であっても、これを小人や婦女に説き聞かせたところで、それが何を言っているのかを理解することはできない。[10]

と詩による教化の限界を提示する。そこで、

今世の南北歌曲は、市場の子弟、田里の農夫といえども皆理解し歌っている。今日の歌曲は昔の詩と同じで、その言葉はわかりやすく、人の心に入りやすい。近世以来南北の戯文が作られ上演されているが、古礼にはあわないが、観るものは皆それを理解でき、すぐに感動して覚えず浮かれてしまうのである。[11]

と、誰でも理解しやすく、また心を動かされる歌曲を支持する。のみならず、

白が多く唱が少ないのは、塡詞ができないのではなく、観るものに解りやすくしなければならないからで、ふざけやおどけ、馬鹿げたしぐさや言葉が入っているが、それは劇場に笑いがなければおもしろくないからで、これで人々の目を引きつけるのである。[12]　（【西江月】）

と、難しい曲を多々連ねるよりも、白の多用により誰にでも分かり易く、また心を惹きつける構成をとったという。

確かに『伍倫全備』には、全編にわたって人の行うべき理想が表現される一方で、道化役のかなり卑俗な科白なども散見する。つまり、『伍倫全備』は、誰にでも理解しやすいという利点を考慮して戯曲というスタイルを選択し、更に受容層のレベルをかなり幅広く想定し、誰にでも理解し易いように曲よりも白による教化に主眼を置いて馴染みやすさを感じさせ、その興味を引きつけつつ教化していこうと意図した作品だということになる。

では、作者はどの様な材料を用いて受容者の教化を図ったのか。その中心はやはり、副末開場にも「一家人、五倫全備、両兄弟、文武兼全。」（【鷓鴣天】）と設定される主人公の行動を通しての教化である。第二十五齣の伍倫全の白に、そこまでの主人公達の行動を総括する部分があるが、そこには各登場人物一人一人の行動を述べ、彼らが倫理的に正しい行動をとった旨が示される。[13] そしてその末尾に「臣一家之中、五品人倫全備。」とある通り、彼らの行動こそが五倫の理想的実践なのであり、だからこそ『伍倫全備』なのである。作品の筋としてもこれにより伍一族はそれぞれ顕位を得る等の報いを受ける。すなわち作者は、受容者が主人公達の行動を通して正しい五倫の道を学ぶことを期待したのであった。

この様に、登場人物の行動全体を通して教化を実現しようとする意図がある一方で、登場人物の発言を通じてより具体的に細かく倫理を語る場面が多出することも、この作品の特徴と言えよう。その手法としては、次の二点が挙げられる。

先ず登場人物の道徳的発言に多く古人の名言、金言、名句の類が引用される。これは、通俗文学全般に見える特徴であるが、この作品の場合「古人」「聖人」「先儒」等の言説であると断った上で引用する頻度が非常に高く、作品全体で四十箇所近くにのぼる。すなわち作者は、登場人物の言動が古人の崇敬すべき教えに根ざしたものであって、疑いなく学ぶべきものであることを強調しようとしたのであろう。また逆に、時に堅苦しい印象を与えがちな古人の教えを物語の展開の中に鏤めることによって、受容者に無理なく受け入れさせようとする意図もあったに違いない。[14]

次に、登場人物が倫理観を語る上で屢々「世上……」で始まる句が挿入される点である。例を挙げれば、第五齣の外の白に、

……世の役人は、人々が告訴しに来るのを心待ちにしていて、いつでも曲を直とし、是を非としてたくみに取り立てをし、打ったり罵ったり、よってたかって金を手に入れるのだ。……[15]

という如く、この言葉に続くのは、その殆どが現実社会の不道徳さを暴露する言葉であり、理想と現実の落差をより印象づける効果を上げている。副末開場にも、

……この三綱五倫は、誰もが持っており、どの家にも備わっているものだが、世間にあっては物欲にひかれて心が遮られ、その為不孝の子、不忠の臣、不慈の父母、不和の兄弟、気の合わぬ夫婦、信じ合えぬ朋友がでてくるのである。[16]

とあり、作者は単に主人公の言行を通じて理想的道徳観を主張するのではなく、現実社会の実態を見据えた上で、その不道徳を批判することによって、理想的道徳観をより強くアピールする手法を目指したと考えられよう。

『伍倫全備』は以上のような手法によって、受容者の教化を実現しようとした作品である。しかし、斯様な作品全体を読み通した時、どうしても浅薄な印象を受けることは否めない。五倫を語るということに主眼を置いた結果、物語の展開は紆余曲折に乏しく、登場人物の配置も極めてシンプルになってしまっている。また、作品中では例えば主人公兄弟が自己の職分に応じて立派に任を果たそうとする、或いは嫁が病気の姑に自分の肝や股の肉を与えるといった典型的な模範的行為が繰り返されるに過ぎない。さらに、先行する作品の名場面を取り入れた場面構成も散見し、[17]そのことが作品としての新味に欠けるという欠点を際立たせるように思われる。呂天成『曲品』は、

『五倫』[ママ]は大老の鉅筆にして、稍腐に近し。[18]　（「旧伝奇」具品七）

と評するが、結局のところ、内容からしてこのような評価もやむを得ない作品である様に思われる。

しかし、「知識のない者にも解りやすく」という目的を考慮するならば、斯様な内容も仕方のない所かも知れない。単純な筋立てやお定まりの場面構成は、当初の目的の為には充分な効果をあげ得るであろう。事実、この作品は当時広く行われたという。明・沈徳符『顧曲雑言』は、

『五倫記』[ママ]は今に至るも人間に行はる。真に所謂不幸にして伝はるなり。[19]

と言う。つまり、沈徳符が苦々しく思うほどに『伍倫全備』は巷に流行していたらしいのである。そういった意味

では、この作品の作られた目的は充分達成されたと言ってよいのかも知れない。

三、『伍倫全備』の目指した教化とその背景

ところで、『伍倫全備』が目指したのはどの様な受容層に対する教化であろうか。前述の通り全体的に平板な内容でしかないこの作品において、突出した印象を受ける点が幾つかある。

先ず、不必要なまでの詳細な儀式の描写が挙げられよう。すなわち、第十二齣に伍家と施家の結婚の場面があるが、この場面では婚儀の手順が伍家の従僕永安の指示という形で詳細に描写される。婚儀の場面の冒頭を例に挙げれば以下の如くである。

（夫）伍倫全、伍倫備、你兩兄弟過來。我分付你則箇。（末）請老夫人行醮禮。（夫）永安、取酒來、遥與二位官人。（末）酒在此。（夫）跪、受酒。（末）啐酒。聽訓辭。（夫）往迎爾相、承我宗祀、勉率以敬、若則有常。（生・小生）諾。惟恐不堪、敢不承命。……

実は、古本戯曲叢刊本はこの中の酒に関する白を省略してしまっているのだが、それは恐らくあまりの細かさに冗長感を覚えた結果であろう。実際、これ以降の婚儀の手順にしても、いちいち各人の拝礼に至るまで指示するなど、詳細すぎる嫌いがある。また、第二十六齣の伍兄弟が母親の墓前に駆けつけるいわゆる「奔喪」の場面も、兄弟の嘆き悲しむ様子が繰り返し語られ、諄さすら感じるほどである。斯様な少々詳細に過ぎる儀礼重視の姿勢は、一体何に起因するのであろうか。

この婚儀の場面は、実は邱濬の著作『家礼儀節』巻三「昏儀」に述べられる儀式の手順をほぼ踏襲して作られていると思われる。特に先に挙げた部分は、

遂醮其子而命之迎。

〔儀節〕請升座、壻就位、贊者酌酒、鞠躬拜興、平身、升醮席、跪、受酒、祭酒、興、退就席末跪、啐酒、降席、鞠躬拜興、平身、詣父座前、跪、聽訓戒、（父曰）「往迎爾相、承我宗事、勗率以敬、若則有常。」（壻答

曰)「諾。唯恐弗堪、不敢忘命。」……　（傍線筆者）

という記事と類似することがわかる。『家礼儀節』のこの段は『礼記』昏儀を踏襲したものでもあるので、『伍倫全備』は『礼記』によったとも考えられる。しかし、この後の新婦が婚家に入る時、車ではなく轎を使っている点などは、『家礼儀節』に「今の俗、……女易ふるに轎を以てす。」とあるのと合致する等、『家礼儀節』に依拠すると考える方が妥当であろう。また、先に挙げた「奔喪」場面も同じく『家礼儀節』巻六に示される手順に則ったものなのである。

では、『家礼儀節』とはいかなる著作であろうか。その序文において邱濬は次のように述べる。

竊に以為へらく、家礼一書は、誠に邪説を闢け、人心を正すの本なり。天下の人人をして此の書を誦し、家に此の礼を行はしむれば、慎終して道有り、追遠して儀有り、……儒道豈振はざること有らんや。……竊に文公家礼本註を取り、約して儀節と為して、易ふるに浅近の言を以てし、人をして曉り易く行ふべからしむ。[20]

また、彼の主著である『大学衍義補』にも『家礼儀節』についての言及がある。

古礼を明かにし、以て人心を正し邪説を息つに非ざれば、則ち民財愈匱しくして、性愈蕩る。幸にして『朱氏家礼』一書有り、簡易にして行ふべし。乞ふ、有司に勅して凡そ民間に冠昏喪祭有らば、一に此の礼に依りて以て行はしめんことを。[21]

これらの記事からは、邱濬が『家礼儀節』を「誠闢邪説、正人心之本」として重要視し、これを広く世に広めたいと考えていたことがわかる。

してみれば『伍倫全備』の『家礼儀節』とのつながりも、斯様な邱濬の願望を色濃く反映したものではなかっただろうか。邱濬は『家礼儀節』の内容を『伍倫全備』に盛り込むことで、この書に基づいた礼を広く世に広めたいとしたと考えられる。また、このことは、丘濬が『伍倫全備』を自説を展開する手段として利用していたことを示していよう。『伍倫全備』と『家礼儀節』との関係は、邱濬が戯曲作品に、単に一般論レベルでの儒教的倫理観の展開以上の役割を持たせようとしていたことを示す具体例として注視すべきである。

他方、『伍倫全備』と『家礼儀節』との斯様な関連性を見る時、そこに邱濬の、『伍倫全備』によって単に儒教的

倫理観の宣揚を目指すのみならず、邱濬独自の考えを盛り込み広めようとする意図を看取できるように思われる。その様な観点からこの作品を見ると、作品中に顕彰が二度にわたって行われる点が注目される。すなわち第二十九齣にて主人公達は全て登仙して団円するが、この登仙について伍倫全の白は、

　此れ蓋し俺一家、五者の倫理倶に皆全備し、上帝人寰を俯察し、特に用て甄録し、以て世人の勧を為すこと、亦猶ほ今世の官府の、節義を旌表し、以て風俗を勵すがごとし。[22]

というように、それが上帝の意をうけた登仙であることを明示する。しかしこの戯曲では先述の通り第二十五齣に全体の総括および団円が見えており、その時点で「五倫全備」は完成しているので、この作品はそこで完結したとしても何の問題もない。にもかかわらず更に二十九齣まで続く構成になっているのは、或いは主人公が致仕し、生涯を終えるまでを語り尽くして初めて物語の完結をみる、という考えに基づいたものとも考えられようが、それでもやはり蛇足の感は否めない。されば、作者は何故二十九齣まで延長したのであろうか。

ここで最後の四齣に語られる内容を検討してみたい。第二十六齣は先述の「奔喪」部分、二十七齣は中書省で政務に励む伍倫備の疲れを癒そうと平話を聴く場面、二十八齣は大将軍として辺境で軍務につく伍倫全が遊士に守備の方策を聞き、また不幸な妓女を助ける場面、そして二十九齣は団円である。

この中、二十七齣の平話で語られるのは唐代の宰相についてで、名宰相として房玄齢・張九齢、奸臣として李林甫・盧杞・盧懐慎・裴延齢が挙げられ、宰相論に発展する内容である。この平話について伍倫備の白に、「這廝の説ふこと、耍話と雖も、規戒を忘れず。」[23]と評しているところをみれば、作者がこの部分を「規戒」として受け止めるよう観客或いは読者に要求していることは明らかであろう。

さて一方、第二十八齣の主眼は「軍事」にある。ここでは一齣の大半を費やして将軍のあるべき姿を追求しており、伍倫全は大将軍として辺境軍備について遊士に意見を求め、遊士は『孫子』に見える「智、信、仁、勇、厳」の五箇条を要諦として詳細に教授する。

すなわち、第二十七、二十八齣はそれぞれ宰相論、将軍論であって、文臣武将相対した内容で構成されているのである。そもそも皇帝の命により伍倫全が征虜大将軍として辺境に配され、一方伍倫備が金紫光禄大夫として中書

省に配されたのも、この二齣を引き出すための布石であったと考えられる。では、この二齣によって作者は何を言おうとしたのか。

『重編瓊台会藁』巻四に次の詩がある。

公卿は属を率て王道を行ひ、将帥は兵を厳くして国威を振ふ。海内の軍民咸業に楽み、辺方の万姓尽く来帰せん。[24]

（「代勉文武臣四首其三」）

文臣、武将が各自その役割を全うし、国威を発揚する。これこそ国家の理想像であり、人臣の目指すべき目標であろう。作者はこの理想を追求すべく、伍倫全・伍倫備の言動を通じてあるべき宰相、武将の姿を描き出そうとしたのである。

しかし疑問として残るのは、ここに述べられる宰相論、或いは将軍論が、何の為に存在するのかという点である。先述の如く副末開場はこの作品の受容者としてかなり幅広い層を想定していたと考えられ、また、作品中では主人公兄弟が科挙に合格し、それぞれ諫議大夫、太守に任じられるという展開に合わせて、繰り返し官吏の理想像が語られている。斯様な部分は、この作品が知識人、或いはその予備軍を教化の対象とし、彼らがその身を正し、官吏としてあるべき姿を追求することを期待して作られたものであることを端的に示していよう。しかるに、最後に述べられる宰相論、将軍論はその枠を越えたものである。すなわち、此処に至って作者は、一般の官吏のみならず、より上層の者をも視野に入れた内容に切り替えているのである。

してみれば、『伍倫全備』は一般官吏及びその予備軍の教化を主題としつつも、それにとどまらず、より上層の、政権の中枢に位置する高官、ひいては国家そのものの理想論の展開にまで踏み込むことを試みた作品であった。儒学者たる作者にしてみれば、個々の官吏のあり方を正すのみならず、国家全体の理想像を追求してこそ真の教化が実践されると考えたに違いない。結果として、作品全体としては対象の定まらない散漫さを抱えてしまっているが、作者にとっては、自己の目指す教化を表出させることの方が優先事項であったのであろう。

ところで、名宰相の一人として張九齢が挙げられていることは注目に値する。張九齢は邱濬と同じく嶺南の出身であり、邱濬が彼を非常に尊敬していたことは、邱濬の著作の中にも屢々見受けられることである。例えば、「張

文献公曲江集序」[25]に、「予は公より六百余年の後に生れ、公の人と為りを慕ふ。」[26]というが如くである。邱濬と張九齢の関係については広く知られた事であったらしく、当時尹直は、「曲江は其の師、東坡は其の匹なり。」と賛し、世に知言とされたという。[27]邱濬は張九齢の『曲江集』出版にも尽力し、「自来京師にて太学に游び、官翰林に入り、蔵書家に遇ふ毎に、輒ち之に訪求するも、竟に得べからず、蓋し二十年に余らん。歳己丑、始めて公の『曲江集』を館閣の羣書中に得。」[28]（「張文献公曲江集序」）と苦労の末にその手稿を作り、後に張九齢の出身地での出版につなげている。

『伍倫全備』が張九齢の名を挙げるのも、彼に心酔している邱濬とすれば至極当然のことだったであろう。邱濬は「寄題曲江張丞相祠堂」[29]詩で、「兒時夢寐慕郷賢、購訪遺編四十年。秘閣抄來郡齋刻、文章功業兩皆傳。」と詠んでいる。『伍倫全備』に張九齢の功績を述べることは、彼にとって『曲江集』の出版によって張九齢の文章を世に広める行為と同じく、「郷賢」を顕揚するという重要な意義を有していたのではないか。

四、結

以上に述べたように、『伍倫全備』は一般の官吏のあるべき姿から政権にたずさわる高官の理想像までを述べようとした作品であった。しかし、結局は全体としては浅薄な印象の作品に仕上がってしまった感がある。また、戯曲というスタイルを用いての斯様な創作が、当時受け入れられたかは、「理学の大儒、宜しく心を詞曲に留むべからず」と皮肉られたことがあったらしいことからすれば、極めて疑問であると言わざるを得ない。[9]

それでも、この『伍倫全備』が上梓されて以降、この作品の影響を受けた動きがあったことも忘れてはなるまい。当時この作品は広く流行したと考えられ、また一方では、例えば、「五倫新伝」と称する邵燦の『香囊記』や、沈齢の『龍泉記』[30]のように『伍倫全備』の影響を強く受けたとされる作品が登場した。後世さして高い評価を受けたわけでもない『伍倫全備』に対して、それに倣う作品が複数、しかもあまり時間的隔たりがない時期に作られたらしいことは、注目に値しよう。すなわち、『伍倫全備』は当時かなりの影響力を持っていたらしいと推測されるの

であるが、では、これらの後続作品は邱濬の意図した所をどこまで受け継いだのであろうか。また、戯曲による教化の実践は以後どの様に受容されていったのか。これらの点については、以降の通俗文学の性質への影響をも含めて、改めて検討する必要があろう。

注

（1）原文：括其門類、大約有六。一曰忠孝、一曰節義、一曰風情、一曰豪俠、一曰功名、一曰仙佛。元劇門類甚多、南戯止此矣。

（2）原文：永樂九年七月初一日、該刑科署都給事中曹潤等奏乞勅下法司、今後人民倡優装扮雑劇、除依律神仙道扮、義夫節婦、孝子順孫、勸人爲善及觀樂太平者不禁外、但有褻瀆帝王聖賢之詞曲駕頭雑劇、非律所該載者、敢有收藏傳誦印賣、一時拿送法司究治。奉聖旨、但這等詞曲、出榜後、限他五日都要乾淨将赴官燒毁了、敢有收藏的、全家殺了。

（3）明代の戯曲の斯様な性格について、岩城秀夫氏『中國戯曲演劇研究』「明の宮廷と演劇」（一九七二年　創文社）に指摘がある。

（4）原文：雑劇、……皆可以厚人論（ママ）、美風化。

（5）原文：客問于余、「……、復有所謂『三國志通俗演義』者、不幾近于贅乎？」余曰、「否。……、是是非非、了然于心目之下、裨益風教、廣且大焉、何病其贅耶？」

（6）本稿では、『古本戯曲叢刊初集』所収明世德堂刊「新刊重訂附釋標註出相伍倫全備忠孝記」四巻を使用し、『原本国語国文学叢林』二十二「原本伍倫全備諺解」を適宜参照した。

（7）田仲一成氏『明清の戯曲』（二〇〇〇年　創文社中国学芸叢書（9））第七章「宗祠演劇における宗族の戯曲選好」第二節「大雅類」参照。

（8）『椒丘文集』巻三〇「贈特進左柱國太傅謚文莊公墓誌銘」による。

（9）『伍倫全備』は邱濬の作ではないとする説もあるが、明人沈德符『顧曲雑言』に、「初與王端毅（恕）同朝、王謂「理

學大儒、不宜留心詞曲」、邱大恨之。因南太宰王俔爲端毅作『王大司馬生傳』、稱許太過、遂云「若有豪傑駁之、禍且不測。」又端毅所刻疏稿、凡成化間留中之疏、俱書不報、邱又謂王「故彰先帝拒諫之失」。御醫劉文泰得邱語、因挾仇特疏、而王遂去位。――所以報『伍倫』之怨也。」（「邱文莊塡詞」）と、王恕に戯曲を作ったことを皮肉られた邱濬が、その恨みから王恕を辞職に追い込んだという事件を紹介する。この様な記事が存在する他にも、明清の多くの曲論書が『伍倫全備』を邱濬の作とすることから判断して、邱濬が戯曲を作っていたこと、及び『伍倫全備』を彼の作品とすることは、ひとまず信じてよいであろう。また『遠山堂曲品』に、「或謂文莊有『種情麗集』、自述少年所遇、或有譏之者、遂令門客促成此記、以節孝掩風情耳。」と言う。これを信じれば『伍倫全備』は邱濬の作ではないことになるが、それでも彼の監督下において彼の意向に添った形で著されたことに変わりはないであろう。

(10) 原文：古人歌詩、而今見在、雖然讀書秀才説與他、也不曉得、況其餘人。不讀是古詩、今人佐的律絶選詩、説與小人婦女、也不知他説個甚的。

(11) 原文：若是今世南北歌曲、雖是街市子弟、田里農夫、人人都曉得唱念。其在今日、亦如古詩之在古時、其言語既易知、其感人尤易入。近世以來、做成南北戲文、用人搬演、雖非古禮、然人人觀看、皆能通曉、尤易感動人心、使人手舞足踊、亦不自覺。

(12) 原文：白多唱少、非干不會把腔塡、要得看的、個個易知易見、不免插科打諢、粧成喬態狂言、戲場無笑不成歡、用此竦人觀看。

(13) 該当箇所は以下の通り：微臣繼母范氏、二十四歳守制、養育教訓兩兒、一擧成名登第。江東藩憲重臣、曾上封章表異。小兒叨官郡守、大兒忝爲近侍。偶因上表薦師、其中別無私計。曾以職事上言、頗爲當權所忌、假托暗裡中傷。因此謫宦邊地。窮邊孤壘、無片甲疋騎。虜人乘吾無備、倏爾出其不意、四邊救援俱無、就裡絶無諸峙、忽然來襲我營、不幸爲虜拘縶。臣母一聞此言、遂感一口氣、因此遂成病疾。百計求醫禱祀、臣妻割取心肝、弟婦割股爲劑、老母天年竟終、二婦依禮葬祭。又臣妻在家、見臣壯年乏嗣、時與微臣娶妾、萬里遣人送寄。不幸中途遇虜、守制不爲汚穢、跳在清冽井中、咬指出血書字。念、臣一家之中、五品人倫全備。當臣被難之時、臣弟棄官救濟。義弟名安克和、臨難將身遮蔽。又有家僮永安、也能臨死不避。……（傍線筆者）

(14) 例を挙げれば、以下の通りである……

(生) 永安、何處好遊耍？……(末) 後面是歌樓、上頭住的、張月仙李雲卿。每日間、舞低楊柳樓心月、歌盡桃花扇底風。此處最好耍。(淨) 是好、是好。二位哥哥作成我討個標致表子多少是好。(生) 聖人言、「血氣未定、戒之在色。」此處不好耍子。(第二齣)

(15) 原文：世上做官的、巴不得百姓來告狀、往往受曲作直、以是爲非、百般暗索巧取、打人罵人、攢人夾人、取貪錢鈔。……。

(16) 原文：這三綱五倫、人人皆有、家家都備、只是人在世間、被那物欲□引、私意遮蔽了、所以爲子有不孝的、爲臣有不忠的、父母有不慈的、兄弟有不和的、夫妻有不相得的、朋友有不相信的。

(17) 伍倫全、伍倫備、安克和が殺人の罪に問われた際に互いに庇い合う場面（第5齣「一門爭死」）は、秦簡夫の雜劇「宜秋山趙禮讓肥」第3折に、その後范氏が「伍倫備が犯人である」と申し立てる場面は關漢卿の「包待制三勘蝴蝶夢」第2折にそれぞれ類似する。このことについては『明清傳奇綜録』（河北教育出版社一九九七年）に指摘がある。

(18) 原文：『五倫』大老鉅筆、稍近腐。

(19) 原文：『五倫記』至今行人問、眞所謂不幸而傳矣。

(20) 原文：竊以爲家禮一書、誠闢邪説、正人心之本也。使天下之人人誦此書、家行此禮、愼終有道、追遠有儀、……儒道豈有不振也哉。……竊取文公家禮本註、約爲儀節、而易以淺近之言、使人易曉而可行。

(21) 原文：非明古禮、以正人心息邪説、則民財愈匱、而性愈蕩矣。幸而有『朱氏家禮』一書、簡易可行。乞勅有司、凡民間有冠昏喪祭、一依此禮以行。（巻八十二「廣教化以變俗」）

(22) 原文：此蓋俺一家、五者倫理俱皆全備、上帝俯察人寰、特用甄録、以爲世人之勸、亦猶今世官府、旌表節義、以勵風俗耳。

(23) 原文：這廝説的、雖遊耍話、不忘規戒。

(24) 原文：公卿率屬行王道、將帥嚴兵振國威。海内軍民咸樂業、邊方萬姓盡來歸。

(25) 四庫全書所収『重編瓊臺會藁』巻九。

(26) 原文：予生公六百餘年之後、慕公之爲人。
(27) 原文：曲江其師、東坡其匹。（道光二十一年重修『瓊州府志』巻三十三）
(28) 原文：自來京師游太學、入官翰林、每遇藏書家、輒訪求之、竟不可得、蓋餘二十年矣。歳己丑、始得公『曲江集』於館閣羣書中。
(29) 『重編瓊臺會藁』巻四。
(30) 『龍泉記』は現存せず、『群音類選』等に数曲が散見するのみで、その全貌は明らかでない。しかし、『遠山堂曲品』に、「節義忠孝之事、不可無傳。沈君手筆、絶肖丘文莊之『五倫記』。」（「能品」）と言うように、『伍倫全備』から強い影響を受けた作品であったと推測される。